

---

seth azrael

羅幻徒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

seth azrael

### 【Nコード】

N1289U

### 【作者名】

羅幻徒

### 【あらすじ】

瓦礫の中に佇む二人の姿があった。投げやりな眩きを零す青年に、壮年は瓦礫を取り除いている人ばかりを指差す。そこは、青い屋根の家があった場所だった。

**(前書き)**

某所の”東日本大震災応援企画”投稿作です。  
無神経な場面があるかも知れませんが、作品としてご理解ください。

雲一つない澄んだ空は、まるで何枚もの色画用紙を並べたように鮮やかな輝きを湛えていた。風も軽やかな春の陽気が、その広がりをも更に深い彩りへと導いている。

しかし、その空に舞う鳥の姿はない。芽吹きの季節を謳歌するさえずりさえ伺えず、憩いの場の不明を訴えるかのようにそよぐ空気の中に沈黙だけが重く漂っている。

現に、ここに鳥達の安住の場はなかった。閑静な住宅地であったそこは、今や瓦礫の山と化していた。人間によって設けられた小屋や餌場どころか、その人間達の生活していた痕跡すら無惨に打ち砕かれている。面影すら忘れさせる残骸の山と潮臭い泥土、そして鼻を突く腐臭だけが一帯を覆い尽くす全てだった。

そんな瓦礫の傍らに二人の男が佇んでいる。浅黒い肌の快活そうな青年と、対照的な印象を持つ長身の壮年。二人は一面の悽愴を見渡しながら何を注視するでもない目を、失った遮蔽物に低くなった稜線へと向けていた。その視界には瓦礫の山を掻き分けるように動く人々の姿が点々と見え隠れしているが、好奇心も興味も彼らの気怠げな佇まいからは認められない。

「なあ」

と、青年が彼方の蠢きを見るときもなく見ながら云った。

「ここ、さ。このままにしておく、って訳にはいかないのかな？」

壮年の目が向けられたことを意識しているのかいないのか、青年の表情からはやはり何も察せられなかった。ぼんやりと周囲を眺めていたと思うと、飽きたように足下を見る。そうして地面を覆うトタンの板に気塞いの態で腰を下ろすと、ゆるりため息を吐き出し

た。

そのトタンは、数週前には屋根だったものだ。ある一家の人生と生活を文字通りに守っていた代物だが、今は地面に投げ出され、冠していたはずの家屋は跡形もなく消え去っていた。粉碎したのは、強大な地震が引き起こした巨大な津波。前代未聞のマグニチュードを記録した激震によって打ち振られた造成物は、その直後に発生した狂瀾によって根こそぎに押し流されてしまった。一帯の惨状はマスメディアによって全世界が知るところとなったが、そこで営まれていた朴訥な生活を知る者は今や一握りとなっている。

スニーカーの汚れを気にしているかのように視線を落とした青年を、壮年は何処か不思議なものでも見るような目で眺めている。青年は、そんな壮年の視線に慣れ切っているかのように無頓着だ。

壮年が口を開く。

「何故、このままにしておきたい？」

肩を叩かれたように声の主をちらりと見上げた青年は、興味を失ったように夥しい瓦礫の連なりへと目を反らした。だがその声は、緊張に張りつめたような固さで物哀しく空気を震わせている。

「誰がこんな場所に住みたいと思うんだ？ それに、生き残ったのは年寄りばかりだ。復興に十年もかかるってんなら、きれいになった時にはもう誰もいなくなってるよ」

「そうとは限るまい。年若い人も思うよりいるだろうに」

「元々仕事だつてなかったんだ。それならこのままにして、観光地にすればいいじゃないか。原爆ドームみたいにさ」

「それは少し、残酷が過ぎるのではないかな。恐怖を追体験させられるのだから、離れ難く思う人々には辛いだけだろう。彼らは永遠に救われなくなってしまう」

「人間はどんなことだつて忘れるよ。案外簡単にね」

一瞬つまらなそうな色を見せた青年は、言葉にならない歯がゆさを歪めた唇に湛えながら俯いた。

憎まれ口を叩きながらも青年の心に占めているものが無念の一語に尽きることを、壮年は知っている。全てを奪われ、取り返すことすらできない幾多のものが青年を苦しめていることも理解していた。しかし、慰めの言葉はかけたことがない。彼の役目ではないことを認めているし、それは青年が自身で精算していかねばならないことだからだ。彼にできるのは導くことだけ。そして、今こそがその使命を全うする時だった。

「そう、人間は忘れるものだ。けれどそれは、過ぎ去りし日々を慈しむための能力でもある」

柔らかな言の葉を青年の耳へと漂わせてから、壮年は柔らかな風をゆったりと吸い込んだ。そうして芬々たる臭気を肺腑に収めた彼は、まるで名残を惜しむように長い睫を震わせた。

「そろそろだ」

青年が弾かれたように顔を上げた。無残の地平を見、次いでひっそりと佇む壮年を振り仰ぐ。そこには、彼方を示すように手を捧げている姿があった。

見ると、蠢くばかりだった人々の姿が瓦礫の一つに立ち向かっていた。覆い被さり、積み重なる柱材の山を崩そうとする懸命が見て取れる。呼びかけるように繰り返す犬の鳴き声とチェンソーの唸りはけたたましく、それは酷く耳障りだ。しかし、神経を逆撫でるその騒音に、何故か青年の胸は切なく締め付けられていた。

そこにはかつて、青い屋根の小さな一戸建てがあった。漁師だった祖父の家をリフォームした父親が、幼かった息子の希望を入れて赤かった屋根を塗り変えた。パイロットを夢見た息子の部屋は、屋根と同じように空色で埋め尽くされていた。そんな父親の愛情は、曲芸飛行隊のポスターや、戦闘機や旅客機のスケールモデルや、航空工学に関する書籍らと共に、今は見る影もないのは想像に難くない。

そんな情景が見えてでもいるかのように、壮年が厳かに告げる。

「どうやら、彼らは君を見つけたようだ」

引き寄せられるように目を向けた青年が、呻きにも似たため息を吐き出した。その嘆息には、押し込めていた不安と解き放たれた安堵とが入り交じっている。受け入れねばならない事実と諦観をも内包したそれは、青年の腰掛けていたトタンの上を滑って霧散した。

壮年の手が青年の肩にそっと触れた。促されるように立ち上がった青年に、壮年は云う。

「いつか、ここは健やかな景色を、美しい営みの風景を取り戻すだろう。そこに住まう人々のために 君達のために」

慈しむように見渡す壮年に倣ってぐるりを見渡した青年が、唐突に目を見張った。二人ずつの、まるで青年と壮年のような人影がそこここに点在している。何故、今の今まで気づかなかったのだろう。問いかけるように投げかけられた青年の視線に、壮年は柔らかな微笑んだ。彼の笑顔を初めて見た青年は、そういえば彼はいつから傍にいたのだろう、という疑問に心を戸惑わせる。しかし、促されるように手を取られた途端、全ての懸念は無に帰していた。そのことすら気づかない青年の目には、一条の陽光のように煌めく壮年の姿があるばかりだった。

「さあ、行こうか」

そうして掻き消えた彼らの姿を認めた者はいない。けれど、小鳥が何処からか現れて青いトタンに羽を休めた姿は、瓦礫に挑む幾人かの目に留まっていた。

(後書き)

ご精読アリガトウございました。

ご意見・ご感想・ツッコみなどは遠慮なくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1289u/>

---

seth azrael

2011年6月16日22時26分発行